

豊岡偉人伝 6

私たちの暮らしの発展に尽くし、近代日本の礎を築いた人、スポーツ・芸術の普及発展に心血を注いだ人など、豊岡にはさまざまな先人たちの心が息づいています。

その先人たちに学び、志を引き継ぎましょう。

《問合せ》文化振興課 ☎23-1160

世界に「SABO」という言葉を広めた砂防の父 赤木正雄

赤木正雄 (1887～1972)

引野出身 農学博士・政治家
1971年 文化勲章受章



▲文化勲章受章時の写真

代々、引野の大庄屋の家に4男2女の末っ子として生まれました。父甚太夫は公共事業に熱心で、蓼川(円山川)堰水路の改修や中郷区護岸工事などの責任者を務めていました。また1906年の大洪水で決壊した堤防を修理する

ために、私財を投げ打って工事を完成させるほどでした。

生家は円山川沿いにあるため、氾濫するたびに家も田も甚大な被害を被っていました。軒につるされた舟は、その難から逃れるためと、付近の住民に炊き出しを運搬するために使用されて



▲軒につるされた舟

いました。この幼少期の記憶が、その後の人生を大きく左右させます。豊岡中学校から第一高等学校(東京大学の前身)



▲洪水から守るため、高い石垣で囲まれた生家(国登録文化財)

に進み、当時校長であった新渡戸稲造と出会います。新渡戸校長は、関東豪雨の被害を受けた直後の始業式で、全校生徒を前に「治水のことは決して華やかな仕事ではない。しかし、人生表に立つばかりが最善ではない。ここに集まった諸君のうち一人でも一生を治水にささげ、災害の防止を志す者はないか」と訓示しました。その言葉に感銘を受けた赤木氏は、この時から治水の道を歩む決意を新たにしました。

●砂防への熱き想い

東京帝国大学(現東京大学)を卒業後、すぐに内務省に入り、滋賀県瀬田川支流を手始めに吉野川・淀川・立山山系・飛騨山系・六甲山系など、全国にわたり自ら主任として砂防工事を指揮しました。

36歳の時、日本の砂防に限界を感じた赤木氏は、内務省を休職して自費でオーストリア・ウィーン農科大学に留学しました。2年間の研鑽を積んで帰国してからは、内務省で近代砂防技術を習得したただ一人の技師として手腕を振るいます。

1942年に55歳で退官するまで、全国各地の現場に赴き、砂防工事の指導に当たりました。また、京都帝国大学(現京都大学)や日本大学などで講義を行い、砂防理論を確立させていきます。

●砂防から世界共通語「SABO」に

退官後、貴族院議員、次いで参議院議員となって建設政務次官などを歴任し、戦後、GHQ(※注)に砂防の必要性を認めさせました。

1951年来日したアメリカ最高技術委員会会長ローダミルクの提案により、同年、ベルギーのブリュッセルで開催された国際水文科学学会で、溪流等の浸食をコントロールすることを「SABO」とすることが認められました。

その一生を砂防にささげた赤木氏は、亡くなる前年、豊岡名誉市民に推され、またその功績が認められて文化勲章を授与されました。「砂防の父」、「砂防の神様」と呼ばれた彼は、1972年、85歳で亡くなりました。引野の生家近くに「生誕の地」の石碑が、また塩津水防倉庫北側には、リュックサックに脚絆という独自のスタイルの銅像が建てられています。なお、出石川防災センター(いずし古代学習館)一角に功績をたたえる展示コーナーがあります。



▲円山川とその先の生家を見つめて立つ銅像



▲出石川防災センター

※注…連合国軍最高司令官総司令部

●発行／豊岡市
☎07966123
市長室 FAX 24-1004
●編集／政策調整部秘書広報課
FAX 23-1124

〒668-8666
兵庫県豊岡市中央町2番4号
URL <http://www.city.toyooka.lg.jp>

(総合支所)
・竹野 ☎47-1111
・出石 ☎52-3111
・城崎 ☎54-0001
・日高 ☎42-1100
・但東 ☎54-1000